
なりきりという遊び

大一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なりきりという遊び

【Nコード】

N7730Y

【作者名】

大一

【あらすじ】

脳科学の発達した、近未来の仮想日本。“半脳化”の技術は多大な利便さと、人的格差と、三千万人のストレスに悩む人々を創り出した。作ったものが革新なら、その解決も同じ革新。ストレス解決の緒として日本国民が見付け出したのが、なりきりという遊びだった。

導入（1）

今から少しだけ先の、仮想の世界の話。

そこではアメリカとロシアが強国で、中国が台頭し、EUはまとまりきれていない。アフリカの多くの人々は尚も貧困であり、イスラム圏では砂漠に巨大な建物が建っている。

そういった世界では、勿論日本も皆さんが知っている姿のままである。

政治は不安定で、経済は停滞していて、土地柄が年じゅう災害が起こっている。

自殺者は何年も連続して年間三万人。とてもじゃないが、明るい未来やその展望は見えない国だった。そう、“だった”のだ。現実の世界とひとつだけ違う進化が日本を変えた。

では違いがなにか、というと脳に関する技術の革新である。人の行動を司り、色で表すと実に気色の悪いアレ。それが分析され、様々な技術に発展したのだ。

一体何処で、どうやって、具体的になにが、そして誰がいつ？

まあそんな事はともかく、発展した技術の一つに『半電腦化』があった。

特殊なヘルメットを通して、脳で直接パソコンやインターネットに接続できるのである。

例えば仕事、事務方であれば文字や図表の打ち込みというのが従来の作業内容だろう。これまでの資料とにらめっこし、些細なミスを

怒鳴られて直し、残業もある。

しかし、そこに半電腦化を持ち込むと、頭に浮かべた文字列がたちまち打ち込まれてしまう。これはあまりに画期的で、作業効率は数十倍に跳ね上がった。しかし日本らしい欠点もあって、仕事の内容も数十倍に増えてしまったというオチがある。

他には車や飛行機などの運転操縦もこの半電腦に切り替わっている。免許を取るのは以前に比べて非常に難しくなり、同時に事故も減った。

社会の動きは物理的、電子的を問わずスムーズになり、徐々に日本の景気も好転を始めたのだ。

それでも、問題は発生した。「頭の良さ」による格差である。

仕事、移動、学習その他もろもろ、ほとんど生活の全てに半電腦化が必要になった現代では、頭の出来が生活の質に直結していたのだ。頭が良ければ仕事はあつという間に出来るし、その出来だつて勿論良い。が、そうでない人は逆となる。

免許の取得が難しくなったというのも、同じような一面がある。運転のセンスは頭の良し悪し。すなわち「バカ」とされる人は車に乗ることを許されない。

これは事故の削減に役立つたが人権問題と化した。日本だから尚更だ。

産業革命が起きた時、これと同じようなことがあった。資本家と労働者の関係だ。それになぞらえて、脳の技術革新は「日本の第二次産業革命」とされた。

安易ではあるが、アルファベット化して三文字程度だからわかりやすかるう。

さて、これらの革新と問題から、日本国民はその多くがストレスを抱え始めた。
捌け口は無いか、と流浪したのは約三千万人。ここでも半電脳化が役立った。

それがインターネットの活用だ。ディスプレイを見なくても、旧来のヘッドホンに近いものを頭に載せれば不思議と電子の世界に没入できる、素敵な技術。そこから更に派生して、三千万の迷える民衆はある小さな趣味を共通した。

それが“なりきり”だった。

導入(2)

四月某日、上野恩賜公園

西郷像からほどない、大型電器店の見える広場のベンチに男が居た。

見たところ年は、二十代後半。仕事に慣れてきて、そしてダレてくる頃だろう。

髪「型」というほどのセットもせず、それを染めもせず、いかにも無難な感がある。

更に言うと、ベンチに座って「満天の星空」をボウッと眺める姿は疲れ気味。

つまりそれは、そう。ストレスを溜めに溜めた『社会問題』の一人だった。

で、くたびれた彼へと、無遠慮に近づく人影があった。

背丈は2mに及ぶかどうかの長身で、黒いロングコートとブーツが印象的な衣装である。

顔付きは西洋人のものであり、瞳も頭髪も、実際のところ染めてもいないブロンドだった。

これだけを見ると、日本を訪れたオシャレな外人にも思えるのだが、

なにより目立つのは、その頭髪の長さだ。

オールバックのようにしてブロンドを後ろに送り、『膝の裏で』一つに束ねる。

つまり、それはほとんど身長に近く、常識的でない髪型なのである。加えてオマケのように、そして当然のように、彼の腰には刀が有った。

マンガがゲームから出てきたようなその男は、ゆつくりとスーツ姿の男性に近付いていき
小気味よいカコンという音と共に、彼の隣に缶コーヒーを置いて、ベンチへと腰を下ろした。
刀は座るのに邪魔であるためか、鞘ごと持って抱えるようにしているのだが。

まず、どう見ても不審人物だ。
スーツ姿の男は、空に向けていた意識を彼に奪われてしまったようである。

金色の瞳に吸い込まれるように、ありがちな黒の双眸を向けていた。
だが、まあ、両者とも男である。外人らしい方もそのケはないらしく、置いたコーヒーを取って
「お疲れだろ？よかつたら、飲まないか」と差し出したのだった。
意外にも、流暢な日本語で。

スーツを来た男、彼の名前は夏山義樹かやま よしきという。
中堅私大の文学部を卒業後、それなりの商社に入社し五年目になる。現在28歳で、彼女はなし。そもそもそういった者は居ない、要らないという人間だ。

彼は、経歴を見ても分かるように大抵のことが凡庸である。

学生時も部活では努力だけを続けて賞は取れず、勉強でも誰より優れたものがない。

得意科目は世界史だったが、それでも学年で何十位というのが関の山であった。

大学生になってからはゆるゆるとバイトをし、なんとなく四年間を過ごし、就職活動にのみ本気で取り組んだ。

入社していくらかは仕事の厳しさと環境から少しは人も変わったが人間、何かに慣れてくるとどうしてもヤル気が出なくなるものなのである。

そして、彼は“半電脳化”への転換期に当たった人物でもあった。パソコンを用いる仕事から、頭脳を直接使った仕事に変わるのである。

電脳化事業は国策のようなものだったから普及に時間はかからず、あっという間に仕事環境は変わってしまった。

夏山はそれが悩みだった。自分で考えて行動するのが苦手なのである。

故に仕事は以前よりも渉らないし、それにとまって上司の言葉が響いてくる。

だから、彼は流行りの遊びに手を出してみたのだ。殆ど無意識に、だが。

「……ありがとう」といって、夏山は缶コーヒーを受け取った。

別段寒い時期でもないが、その暖かさはじんわりと両手に染みみていく。

「あんだ、なりきりは初めてかい？もしかしたら、そういうキャラなのかもしれないが」

スーツ姿はやめとけよ、と不審者じみた男が言う。

「なんでですか、都心でスーツなんて普通でしょう」

「^{リアル}現実ならな。けど、あんたが今いるここは仮想の、なりきりの世界なんだ。

気晴らしするやつ、妄想を形にしちまうやつ、他に上手く使うやつ。理由も居る奴は多いけど、^{リアル}全員現実じゃ出せない何かをここで発散してるんだぜ？

それがアンタ、くたびれたスーツなんて着てて楽しいか？」

と、外人風の そう『なりきった』男は、口早に語り始めた。

コーヒーの缶を持ってきた辺りからもそうだが、お人好しであるらしい。

「俺がこうして、あんなみたいな人に話しかけるのはリアルじゃ勇気が足りなくて出来ないからさ。

けど、この世界なら出来る。顔も出さないし実際の人物像も見えちゃこないからな。

どうだい、アンタも。なりきりつて、なんでもやりたいことが出来て楽しいぜ。お勉強にもなるしな」

「……なんでも、つてなんでも？大金持ちにもなれるしハーレムも出来るし上司もぶちのめせる？」

「ハーレムは相手次第だな。けど、大金持ちにはなれるし、上司がなりきりをやっているのならぶちのめせるさ。そら、見てろよ。なりきりが非現実つてのもこれでわかるだろうから」

その時、ガラスが弾けて鉄骨コンクリートの建物がブチ壊れる音がした。

音のした方向には、例の大型電器店。その何階だかを中心に様々な

残骸が激しく散っていたのである。

そして更に、ほんの数秒もせずに屋内から巨大な光の奔流がはしつた。

光は眩しいだけでなく、どうやらとてつもない破壊力を持っていたらしい。

電器店の中腹には巨大な穴が開けられて、またそこからは火口の如く煙が立ち上っていた。

あまりに現実離れた現象に、夏山の脳は素早く活動を開始した。これはなんだろうか。テロか。いや、日本の上野でテロなど誰がするものか。

だとすると理由は分からないが、それにしても建物が半分吹っ飛んだのに悲鳴が少なくはないか。

ハッと立ち上がって園内を見ても、あまり人は居なかった。

交差点を見下ろすと蒼い軍服という非常識な格好をした人物と、サメのような人型の怪物が見える。

もはや夏山の頭はショート寸前だったが、幸いその両者は争いながら建物の影へと消えていった。

肩に大きな手が乗せられた。驚きから引き戻される感覚など、味わうのはこれが初めてだ。

「なつ。これかなりきりの世界だ、この辺りは人気の場所じゃないから人が少ないが

仮に新宿や渋谷のご真ん中に行けば、さっきの破壊は無くとも俺やアイツらみたいな連中が大勢居るよ」

「そんな……けっ、けど、店が爆破されるなんていくら何でも普通じゃない！」

あんたらの格好だっけどうかしてるけど、なりきりっての自体おか

しいんじゃないのか!？」

口先ではそう否定した。けど、心の何処か隅っこでは期待しているのか夏山だった。

なにかの災害が起きた時、非日常の事態が起きた時、ワクワクしてしまう人種である。

先程、冗談のつもりで言い連ねた言葉が妙に近く感じられる。

ひよっとすると、なりきりという遊びは予想以上の物なのではないか、夏山はにわかに思い始めた。

否定されても笑むだけの男を見ていると余計に、その感情は強くなっていく。

「ああいうことがあると、そのうち正義気取りの連中が集まってくる。

アンタは、まずそいつらに接触してなりきりがどんなものを聞くと良い。

俺が教えたつていいが連中とは仲が悪いんでね。教えるのはいずれ機会があれば、だ」

「なっ……あっ、待ってくれ。あんた、なんて名前なんだ？」

その、コーヒー貰ったし、なんていうかその……知りたい、というか……」

「いいとも、俺の名前はティボー。そうやって名前を尋ねるのがなりきりの基本だ。

相手との繋がりを持って、それを増やして、あとは何をしていくかで楽しみ方は変わる。

それじゃあ犯人扱いされないように気を付けろよ、カヤマさん?」

じゃあなという言葉を最後に男は颯爽と立ち去った。それこそ消えるように。

夏山は、無意識に接続したなりきりという遊びの魅力に見せられながら、手の中の缶を見た。

電子の世界だというのに温かい。顔に当たる大気も本物同然。驚くべき技術革新を身を感じる瞬間だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7730y/>

なりきりという遊び

2011年11月27日01時51分発行